

VRMMO系なろう小説にむかつく兄妹のお話

ghostwriter

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

VRMMO系なろう小説にむかつく兄とあんまり興味がない妹のグダグダな会話をぼーっと楽しむ？ 短編小説です。深夜テンションと勢いで書いたので内容はお察し。

目次

V R M M O系なろう小説にむかつく兄妹のお話

1

VRMMO系なろう小説にむかつく兄妹のお話

兄「なあ妹よ」

妹「どうしたのお兄ちゃん」

兄「兄ちゃんは……VRMMO系の小説が絶対に許せないんだよ」

妹「そう、いま丁度VRMMOのアニメ見てるから話し掛けないうで欲しいんだけど」

兄「ああそのアニメか、たしかステータス極振りとりアルラック系の話だったか」

妹「そうそう、今話題になってる奴、なんだ嫌いとかとか言ってるけど知らなくてんじゃない？」

兄「まあアニメ化してるのは有名所ばかりだからな、原作の方も読んでるぞ」

妹「へー……で、原作面白いの？」

兄「普通の人には面白いと思われてるんじゃないか？少なくとも書籍化漫画化アニメ化してある程度やっていけるようだし」

妹「ふーん……ちなみに兄ちゃんは面白いと思ってるの？」

兄「クソだわ」

妹「うわひでえ酷評」

兄「いやなろう小説と考えれば内容は良い方だと思うぞ？ただ舞台がVRMMOじゃなくて異世界物でも大丈夫で作者がVRMMOニワカなのがクソ」

妹「あー……いやでもなろうならしょうがないんじゃないの？」

兄「いや異世界物なら何の文句も無いんだわ、超幸運と超人的な身体能力で異世界ライフを満喫する。うん超普通で全く怒りも興味も湧かないな」

妹「それはそれで貶してる気がするんだけど……」

兄「ただな?!なんでVRMMOと言うアホみたいなジャンルにした

のかと！74時間程問い詰めたい訳ですよ」

兄「そもそもVRMMOと言う存在そのものがありえないんだわ、常識的に考えろよ、なんで楽しむ為のゲームで痛みを感じながら化物を数千時間も狩り続けないといけないんだよ、そんなの誰も求めてないわ」

妹「いやでも出会い厨の奴らとか居るんじゃ・・・」

兄「出会い厨は出会い厨用のゲームに逃げるだろw」

妹「えーでも吊り橋効果とか戦闘中にドラマチックに出逢いたいと考える人だつて居るだろうし」

兄「うーむそうだな、では分かりやすいように少し話をずらすか」

兄「MMOでは切つても切り離せない存在がある。なんだか分かるか？」

妹「・・・課金コンテンツ？」

兄「惜しい、アバターだ。」

兄「基本的にMMOではアバターは課金かゲーム内バザーで購入出来る、課金で購入する場合数百円から数千円程度の金額が必要になる、一方ゲーム内バザーで購入する場合リアルマネーは必要無いが高額のゲーム内マネーが必要になる、どれくらい高額かと言うとアバター1つ買う為に数週間も金策しないとイケない事がある程だ」

妹「ええ・・・アバター1つ買う為に数週間も必要とか・・・」

兄「じゃあ逆に出逢い系のVRゲームはどうかと言うと、自分でアバター作れるし、他人のをコピーしたりも出来る。もちろんプロにオリジナルを頼むのは数万するがその代わり理想のアバターを作ってくれる訳だ」

妹「なるほど、アバターの入手難易度が違う訳ね」

兄「難易度が違うと言うか方向性が違う訳なんだが・・・まあつまり出逢い系は出逢い系に特化してるからVRMMOには勝てないって事」

妹「ふーん、なあるほどねえ・・・」

兄「なんだ、まだ何か言いたい事があるのか？」

妹「いやまあ出逢い厨はVRMMOに来ないって理屈は分かったけ

どぎ、兄ちゃんが『VRMMOはありえない』って言ってたじゃん?」

兄「うん」

妹「そのの……なんて言うの?……立証?には至ってないよね」

兄「あー」

兄「……分かった、じゃありえない所を一から十まで説明するわ」

妹「えー10も聞かないといけないとか面倒くさいー2に纏めて」

兄「急にダウン系ギャル(死語(死語))にキャラチェンするのやめてくれませんかねえ……しょうがないにやああ……いいよ」

兄「ありえない所は大まかに分けて2つ存在する、現実的に考えてありえないのと小説の描写的にありえない、の2つだ」

兄「現実的に考えてありえないのは文字通り現実的に考えてありえない所、世界中から接続されているにも関わらず溢れない初期街、一切発生しないラグ、PING。描写数無限なものにも関わらずメモリを食わない機械。」

妹「技術が進歩してラグらないようになったんじゃないの?」

兄「いや地球の反対側から接続しても一切ラグ発生しないようにする為には光の速さの数十倍もの速度が必要なんだわ、そもそもフルダイブ技術なんて存在が民間に流れてくる時代ってそうとう未来だろうし、そうなつて来ると人口増加で月とか火星に住んでる人も普通に居ると思うんだわ、そうなつて来るとだな?惑星間の通信でラグが感じれない速度で往復する訳でして、最低でも光の速度の数億倍くらい必要になつて来る訳ですよ」

妹「いやそこまで考えて小説書いてる奴居ないでしょ……」

兄「ああ!? そうだねえ! そこまで考えて書いてる奴なんて居ないねえ! なるうだもんねえ! そこが問題だつってんだろ?! 普通のね? 異世界物とかならね? 別にどうこう言うつもりは無いんですわ」

妹「まーた始まったよ厄介オタクトークが」

兄「ただSFと言うジャンルでそんなアホみたいな小説がランキングにさも居て当然とばかりに居座ってんだぜ？もうねアホかと」

兄「SFってジャンルはだなあ緻密に考えられた設定と妙に現実的な未来像をニヤニヤしながら楽しむ物なんじゃないんか？」

妹「いや知らんわ」

兄「なろうでもそう言うしつかりと設定を練って作ってる作品も確かにある！だがな？そう言う作品はだ！テンプレと作者の願望で塗り固められ、ろくに考えてもせずに適当に書かれたVRMMOと言う糞みたいなジャンルによって日の光を浴びる事無く埋もれてしまうんだよ……」

妹「あつそう、じゃあ兄ちゃんがそう言う作品を有名にすればいいんじゃないの？」

兄「兄ちゃんはな……スコツパーをやり過ぎて、精神が磨耗してしまったんだよ……」

妹「結局面倒くさいだけじゃん」

兄「それに関しては……はい、ぐうの音も出ません。」

妹「はーつつかえ、ほら話戻せよ、さっさと残りの一つも説明しろカス」

兄「では失礼して……ゴホン」

兄「小説の描写的にありえないと言うのは例えそれがVRMMOでなく普通のMMOだったとしてもありえない物の事です」

兄「例えばユニークスキル、何がアウトかと言うと公平性です、じゃあ皆にも配れば良いと思うかもしれませんが全て違う物にするのはいずれ限界が来ますし、ランダムで決まる為望む物とは違う物を入力する可能性が高くなります、更に言うとならMTが横行しPay to winになるでしょうし、そのスキルの強弱でプレイヤー格差が生じ民度や治安の悪化に繋がるでしょう」

兄「そうなつて来ると制作、運営会社のイメージダウンにも繋がる可能性があるので、実装する可能性はかなり少ないでしょう」

妹「うわガチじゃん」

兄「こんなのネットゲしてたら誰でも考えれるもんだぞ？ただそう言

うのすら考慮出来てない辺りやっぱり『ネットゲニワカ』なんだなって」
妹「言うてやるな言うてやるな……」

兄「後は遠距離職と近距離職の格差とかかなー狩り効率とか1体の処理かかる労力がVRMMOだと更に変わるだろうし、遠距離職が異様に増えて近距離職の上方修正からの遠距離職ナーフで荒れる未来が見える見える、多分ギスつてモチベ無くして引退する人達が増えて過疎って無理矢理新規ユーザー増やそうとして新規ユーザー優待し過ぎてバッシング食らって新規ユーザーアンチが増えて新規も根付かず人口が減り続けて課金額も減り予算も減って焦って修正したら改悪ばっかになってクソゲー化してサ終するんだろうなあ」

兄「まあ結局いつかはサービス終了すると分かかっててやってる訳で、それが速かれ遅かれ課金する事に変わりは無いんですけどねー」

妹「こいつももう悟っていやがる……」

兄「あー……昔のリブレスがやりたい、あのバグと糞運営で毎日祭りだったあの頃に戻りたい……ガンオンはなんやかんやフルコーン時代は楽しかったんだよ、新機体がずっとゴミで新マップもカス、改悪MAPばかりだったけど機体バランスは今のロンビ必中オンラインに比べれば最高に良かった、赤ロツクなんて要らなかつたんや……あとカビコーンの修正今でも待つてるぞ……あとブルプロCBTは普通に面白かった……ずっと武器厳選してたら終わったけどな……」

妹「もういい……兄は休め……これは全部悪い夢なんだ……」

兄「……あとこのお話に登場したゲーム・サイトはフィクションであり実在のものとは一切関わりません」

妹「急にどうした兄よついにストレスで頭がぶっとなでしまったか？」

兄「深夜テンションと勢いで書いたものですので誤字脱字等日本語がおかしい所が多々あると思いますが何卒ご理解して？お願い」

妹「やべーな本格的に頭行ってしまったかも知れん、もしもしポリスメン？」

兄「あと兄のセリフは自分で妹のセリフは世間一般的な声と考えて

書きました、一応妹のモデルと言うかイメージはぬきたしのアサちやんとリアル妹です」

兄「やつぱりモデルがあると書きやすいですね、二次小説は初心者にお勧めな理由が改めて実感出来ました、あとぬきたし二次小説もつと増えろ」

兄「ではこの辺で」

兄妹「お疲れ様でしたー」

兄「はいカッt